

社会学部学生のための 卒業論文執筆の手引き

この「手引き」は、社会学部の皆さんが学生として最もその本領を發揮すべき「卒業論文」の作成を援助するためのものです。したがって、卒業論文を執筆しようとする人は、この「手引き」をはじめによく読んでください。

ただし、ここに示してあるのは、あくまでも論文の標準的な書き方に基づいた社会学部の卒論の「原則」であり、ここに書いてあることがすべてではありません。論文作成に当たっては、何より指導教員の個別の指導をきちんと受けながら進めて下さい。

1. 提出期間と場所

- (1) 提出期間 2019年1月9日（水）～1月10日（木）
- (2) 提出場所 白金校舎教務課
- (3) 提出時間 9：30～11：45、12：30～18：30

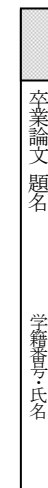
※時間厳守

※提出前に指導教員に提出の了解を得ること。

※期限内に遅れた場合は、理由の如何に関わらず受理しない。

2. 卒業論文用ファイル

- (1) A4版横書き左綴じ用を使用する（明治学院大学生協で販売している）。
- (2) 縦書きの場合も、このファイルを使用して綴じること。
- (3) 抜け落ちのないことを確かめて、綴じ穴の部分に文字がかからないように綴じる。
- (4) 背表紙の書き方



背表紙

- ① 左図を参考に、背表紙に上から「卒論題名」「学籍番号」「氏名」を記す。
- ② 左綴じ（ただし、縦書きの場合は右綴じ）。

3. 論文の体裁・枚数

- (1) 原則としてパソコンないしワープロを用い、横書きで作成すること。
※手書きや縦書きを希望する場合は、事前に指導教員に相談すること。
- (2) A4の白紙（感熱紙不可）に40字×30行で印字して、本文（4(1)の⑤参照）17枚以上（ただし図表等を除く）。

- (3) 文字の大きさは10.5ポイント、余白は上下30mm程度、左右30mm程度とする。
- (4) 黒のインクまたはトナーによる印字を原則とする。
- (5) 必ずページ番号をふること（ふり方は4(2)参照）。
- (6) 文章・文字は読みやすいものであれば自分なりに工夫してよいが、執筆の途中あるいは提出前に指導教員に見せて形式・内容に関する指導を受けること。

4. 論文の構成

- (1) 論文は、以下の順で綴じること。
 - ① 中扉（教務課で受け取ること）
 - ② 表紙（必ずつける）
 - ③ まえがき（つけてもよい）
 - ④ 目次（必ずつける）
 - ⑤ 本文（本文のみで所定の枚数に満たないと受理されない）
 - ⑥ あとがき・謝辞（つけてもよい）
 - ⑦ 参考文献一覧（必ずつける）
 - ⑧ 添付資料・調査票など（あれば最後につける）
- (2) 論文には、各ページ下部にページ番号をふること。
 - ① ページ番号は、算用数字〔1, 2, 3, …〕を用いる。
 - ② 中扉と表紙にはページをふらない。
 - ③ まえがきと目次には本文とは区別するためローマ数字の小文字〔i, ii, iii, …〕などでページ番号をふる。
 - ④ あとがきや参考文献は指定枚数に入らないが、本文に続いてそのまま通し番号でページ番号をふる。

5. 中扉

- (1) 「中扉」は教務課で受け取ること。
- (2) 原則として手書き（黒インクまたは黒ボールペン）。
- (3) 記載事項
 - ① 論 題
 - ② 提出年度
 - ③ 指導教員名
 - ④ 学籍番号および氏名

<div style="border: 1px dashed black; width: 80%; margin: auto; padding: 5px;"> <p style="text-align: center;">-----</p> <p style="text-align: center;">-----</p> <p style="text-align: center;">-----</p> </div>				
<table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="text-align: center;">年度 卒業論文</td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;">指導教員</td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;">学籍番号</td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;">氏 名</td> </tr> </table>	年度 卒業論文	指導教員	学籍番号	氏 名
年度 卒業論文				
指導教員				
学籍番号				
氏 名				
明治学院大学				

※ 論題に副題をつけてもよい。その場合は下記のように、副題の前後（または上下）を棒線ではさむ。

(主題) 〃 — 〃 (副題) 〃 — 全角空ける 全角空ける 全角空ける
--

※ 論題に外国語訳をつける場合、訳語については指導教員に相談すること。将来、留学等で必要になる可能性があると思われるときは、なるべくつけておくこと。

6. 表紙

「中扉」とは別に、論題と学籍番号・氏名を記した表紙をつける。

7. 目次

- (1) 上部の中央に「目次」と記載する。
- (2) 記載例を参考に、本文と齟齬のないように作成すること。
- (3) 各章節の表題は、内容を簡潔かつ明瞭に示すように留意する。

(記載例) □は空欄 ○は文字を示す

目次	
目次	○○
序章	○○
第1章□○○○○○	○○
□第1節□○○○○	○○
・	
・	
第3章□○○○○	○○
□第1節□○○○○	○○
・	
・	
終章	○○
注	○○
参考文献	○○

8. 本文

(1) 本文は少なくとも3つ以上の章から構成し、必要に応じて各章の中をいくつかの節に分ける。

- ① 新しい章に入るときは、ページを変えず3行ほどあけてから章題を書く。節が改まる場合は、ページを変えず2行ほどあけてから節題を書く。
- ② 序章では、論文の目的、論述対象の範囲、研究の意義、論文の構成（各章で何をとりあげるか）等を述べる。
- ③ 終章は、この論文で研究された事柄を要約し、研究の結果発見ないし確認された主要事項、今後の課題などをまとめて結論の章とする。
- ④ 各章の展開は論理的な起承転結になるよう留意する。

(2) 表記については、以下の原則に従う。

- ① 数字は原則として算用数字を用い、半角とする。
例) 昭和61年 1966年 50% 21才 3700万ポンド
- ② ただし、慣用表現（「二束三文」など）やひとまとまりの用語（「第二次大戦」など）はこの限りではない。また、引用の場合は原文に順ずる。
- ③ アルファベットなど欧文は原則として半角とする。
例) America NGO

(3) 引用や参照は、以下のルールに従う。

- ① 通常のレポート同様、剽窃は厳禁である。
- ② 先行研究を引用または要約して掲載する場合は、本冊子末尾の「社会学部生のための文献引用の手引き」に順じ、「I. 注を付ける方式」または「II. 簡略情報を表示する方式」で作成

すること。インタビュー記録や法令など、特殊な引用方式については、指導教員に指示を仰ぐこと。

- ③ 3行以上の引用をする場合には、事例の前後を1行ずつあげ、左右に2～3文字分のインデントを設定すること。
- ④ インターネット上の情報の取り扱いには細心の注意を払うこと（「社会学部生のための文献引用の手引き」参照）。

(4) 図・表・写真の掲載については、以下の原則に従う。

- ① 本文の関連箇所に近いところに挿入する。
- ② 図・表・写真は本文の枚数に含まれない。必要とした行数分を自分で計算して、全体のページ数を規定以上とするよう留意すること。
- ③ 大きい図・表は、別紙に折り込み、ページ番号をふる。
- ④ 図・表・写真の上部に図○、表○、写真○と種類ごとに通し番号を記し、見出しをつける。
- ⑤ 図・表・写真の出典を図等の下に明記する。その際の表記の仕方は文献引用に順ずる。自ら作成した図の場合は、その旨を明記する。

例) (出典) 筆者作成 (出典) 田中(1991:22)

(出典) 田中、前掲書、22頁

(出典) 田中(1991:22)を一部修正

(出典)『○○年鑑』平成1～20年度版を元に作成

- ⑤ 他に注記の必要があるときには、図等の下に注1)、注2)のように指示する。

(5) 注（註）を用いる場合は、以下の原則に従う。

- ① 注は、論旨に直接関係のないが、本文でふれた事項をさらに補足説明する場合に用いられる。なお、引用において「I.注を付ける方式」をとる場合、引用注と説明注の両者が混在することになる。
- ② 注は各章末尾ごとに記すか、全体の末尾にまとめて記す。
- ③ 注の番号は前から通し番号をつける。章ごとに改めても、すべて通した番号をつけてもよい。

9. 「まえがき」および「あとがき」、「謝辞」

- (1) 必要であれば、序章の前に「まえがき」を、注の後・参考文献の前に「あとがき」を記してもよい。
- (2) 「まえがき」では、どのような動機・契機でこのテーマを選んだかなどを書く。
- (3) 「あとがき」では、研究・執筆の過程でどのような問題が起こり、論文を書き終えた現在どのように感じているかなど執筆者の率直な感想を書く。また、研究・執筆の上でお世話になった人や協力してくれた人への感謝の言葉もここに入れる。そのため、「あとがき」を「謝辞」としてもよい。
- (4) 「まえがき」または「あとがき」、「謝辞」を載せる場合は、目次にも反映させること。

10. 参考文献一覧・資料

- (1) 論文の末尾に参考文献の一覧を必ずつけること。論文中に引用したり、論文執筆中に参照したりした資料や文献はすべてここに記す。

- (2) 原則として、文献は、邦文・欧文を混ぜて、著者名（名字）のアルファベット順に並べること。同一著者の場合は発行年順とする。
- (3) 引用が「Ⅱ. 簡略情報を表示する方式」の場合、「社会学部生のための文献引用の手引き」に従う。
- (4) 「Ⅰ. 注を付ける方式」の場合は、簡略注方式と同様にするか、「著者名、『書名』出版社名、出版年」の形とする。
- (5) いずれの場合も、文献1つごとに改行する。1つの文献の情報が2行以上にわたる場合、2行目以降の頭を全角1字分以上下げること。
- (6) なお、参考文献の頁は本文の枚数には入らない。
- (7) 調査研究を行なった場合、資料を参考文献一覧の後ろに添付すること。
- ① 調査票は必ず載せる。
 - ② 統計表、インタビュー記録、ドキュメントの詳細等は、必要に応じて載せる。

11. 参考書

- (1) 論文の書き方一般については、下記の書物が参考になる。
- ・ 野村一夫, 1999, 『社会学の作法・初級編（改訂版）』文化書房博文社.
 - ・ 山内志朗, 2001, 『ぎりぎり合格への論文マニュアル』平凡社新書.
 - ・ 戸田山和久, 2002, 『論文の教室：レポートから卒論まで』NHKブックス.

- ・ 荻谷剛彦, 2002, 『知的複眼思考法：誰でも持っている想像力のスイッチ』講談社+α文庫.

- (2) 過去の学部長賞受賞作品の一部が社会学部HPにて閲覧できるので、是非参考にしてほしい。（HP上で閲覧できないものの閲覧を希望する場合は、指導教員に相談すること。）

社会学部生のための文献引用の手引き

三大原則

1. レポート・論文作成時の盗作厳禁
2. 自分の文章中で、文献や資料を参考にした箇所は明示すべし
3. 参考にした文献や資料は明記すべし

レポート・論文作成の際には、この三大原則に基づいた文献引用のルールを守らねばならない。守らない場合には、単位を落とす・評価が下がるなどの不利益を被っても文句は言えない。

引用には、元文献の記述をカッコ（「」）でくくってそのまま用いる「**直接引用**」と、元文献の記述を自分なりにまとめた「**間接引用**」がある。「間接引用」であっても、直接引用と同じく、参考にした文献の情報を本文中に必ず表示しなければいけない。

本文中に文献情報を表示する方式（文献挙示方式）には、大きく分けて次の2つがある。

I. 注を付ける方式

II. 簡略情報を表示する方式

担当教員から特別の指示がない限り、社会学部生は原則としてこのどちらかの方式に従わなければならない（教養科目等で別の方式を習った場合も、社会学部では本手引きに従うこと）。以下では、その2つの方式をそれぞれ具体的に説明する。また、両方の方式に共通して守らなければならない原則も最後に説明する。

I. 注を付ける方式

(1) 基本的な考え方

引用・参考文献についての情報（文献注）と本文の補足説明（説明注）を一括して表す。

(2) 実際の手順

手順1：引用箇所の直後に、上付き1/4サイズの丸括弧数字（「(1)」など）で注をつける。

・・・橋爪大三郎によれば、「愛ゆえの結婚」というドグマが成立するためには、第一に、ピューリタンの性愛倫理が成立し、そのうえで、第二に、内面的な主体性が承認されなくてはならなかった⁽¹⁾。・・・・・・
・・・ミシェル・フーコーによればこの孤立化の積極的な効用に関して、トクヴィルは次のように主張しているという。「孤立状態に投げ込まれると受刑者は反省する。自分の犯罪にただひたすら直面すると、その犯罪を憎むことを学ぶのであって、その塊が悪によって無感覚になっていなければ、いずれ後悔がその塊を覆うようになるのは孤立状態においてである」⁽²⁾。

手順2：レポートの巻末に、各々の注に対応する中身（文献情報または本文の補足説明）を一覧表にして記す。

注

- (1) 橋爪大三郎『性愛論』岩波書店、1995年、pp.115-185.
- (2) フーコー, M. 『監獄の誕生：監視と処罰』（田村淑訳）新潮社、1977年、p.236.
- (3) ここでいう××とは・・・
- (4) 前掲(1)、p.120.

補足：①注の番号は通し番号にする。

②注は番号ごとに改行する。

③注(3)のようにして、論旨に直接関係はないが、本文でふれた事項をさらに補足説明する場合にも注は用いられる（説明注）。

④同一文献を再度引用する場合は、注(4)にあるように「前掲(1), p. 120」のように記す。これは、「注(1)で表示した文献の120ページを参考にした」、という意味である。

(3)注の中での文献情報表示形式

文献と一口にいても、色々な種類があり、それぞれ示すべき情報が微妙に違う。

以下の原則に従い、過不足なく文献情報を表示しなければならない。

※著者が複数いる場合、記載された順に書く

※全体の内容を参考にした場合は、引用頁の記載は要らない

※該当頁は「p.○」または「pp.○-○」(複数頁にまたがる場合)と表記する

①**日本語単行本**：著者名『書名：副題』出版社名，出版年+年，p.+引用頁。

例)

小熊英二『単一民族神話の起源：〈日本人〉の自画像の系譜』新曜社，1995年。

長谷川公一・浜日出夫・藤村正之『社会学』有斐閣，2007年，p.5。

②**日本語編書全体**：編者名+編『書名』出版社名，出版年+年。

例)

船橋晴俊編『講座環境社会学2：加害・被害と解決過程』有斐閣，2001年。

③**日本語編書の一部**：著者名「論文題名」，編者名+編『書名』出版社名，出版年+年，pp.+論文の初頁-終頁（p.+引用頁）。

例)

船橋晴俊「環境問題の未来と社会変動：社会の自己破壊性と自己組織性」，
船橋晴俊・飯島伸子編『講座社会学12：環境』東京大学出版会，1998年，pp.191-224（p.191）。

④**翻訳書**：著者名『訳書名』（訳者名+訳）出版社名，翻訳の出版年+年，p.+引用頁。

※著者名は、ファミリーネーム，ファーストネーム・ミドルネームのイニ

シャル. の順に並べる（以下同様）。

例)

フロム，E.『自由からの逃走』（日高六郎訳）東京創元社，1951年，p.256。

⑤**日本語雑誌論文**：著者名「論文題名」『雑誌名』巻(号)，出版年+年，pp.+論文の初頁-終頁（p.+引用頁）。

例)

山本泰「マイノリティと社会の再生産」『社会学評論』44(3)，1993年，pp.262-281（p.270）。

⑥**翻訳論文**：著者名「翻訳論文の題名」（訳者名），論文の所収された雑誌や単行本の情報（①～⑤参照），pp.+論文の初頁-終頁（p.+引用頁）。

例)

マッカーシー，J.M.・メイヤー，N.Z.「社会運動の合理的理論」（片桐新自訳），
塩原勉編『資源動員と組織戦略：運動論の新パラダイム』新曜社，1989年，pp.21-58（p.23）。

⑦**外国語単行本**：著者名，_書名_出版社名，_出版年_+pp.+引用頁。

※「_」は半角スペース（以下同じ）

例)

Parsons, T., *The Social System*, Free Press, 1951, pp.1-25.

⑧**外国語編書**：編者名 ed., _書名_出版社名，_出版年_，p.+引用頁。

※編者が複数いる場合は併記して「eds.」とする

例)

Camagni, R. ed., *Innovation Networks: Spatial Perspectives*, Belhaven Press, 1991, p.30.

⑨**外国語編書の一部**：著者名，_論文名_，_編者名_ ed., _書名_出版社名，_出版年_，pp.+論文の初頁-終頁(p.+引用頁)。

例)

Beck, U., "Self-Dissolution and Self-Endangerment of Industrial Society: What Does This Mean?," Beck, U., Giddens, A. and Lash, S. eds., *Reflexive Modernization: Politics, Tradition and Aesthetics in the Modern Social Order*, Blackwell, 1994, pp.174-183 (p.175).

⑩**外国語雑誌論文**：著者名, "論文名," *雑誌名* 卷(号), 出版年, pp.+論文の初頁-終頁(p.+引用頁).

例)

Wrong, D. H., "The Oversocialized Conception of Man in Modern Sociology," *American Sociological Review* 26, 1961, pp.183-193 (pp.183-184).

⑪**年次刊行物**：編集機関名『題名』年次, p.+引用頁.

例)

経済企画庁『国民生活白書』平成6年版, p.101.

⑫**新聞**：「記事名」『新聞名』(年月日朝刊 or 夕刊).

例)

「14歳『心の闇』」『朝日新聞』(1998.6.30朝刊). ※執筆者が明らかでない場合は⑤⑥に準じる。

⑬**インターネット上の情報**：著者名(判明する限り), 最終更新年(判明する限り), 「題名」(URL) 閲覧年月日+閲覧.

例)

日本社会学会, 2006, 「日本社会学会倫理綱領にもとづく研究指針」(<http://www.gakkai.ne.jp/jss/about/shishin.pdf>) 2017.2.9 閲覧.

例)

「明治学院大学社会学部」(<http://soc.meijigakuin.ac.jp/>) 2017.2.10 閲覧.

II. 簡略情報を表示する方式

(1) 基本的な考え

①引用・参照した文献の書誌情報を示す「簡略情報」を本文中に埋め込み、それに対応する「参考文献一覧」を文末に載せる。

②注は、原則として、説明注(本文の補足説明)としてのみ用い、文献注としては用いない(ただし例外あり)。

(2) 実際の手順

手順1：簡略情報「(著者の姓_出版年:_引用ページ)」を文中に埋め込む(※「」は半角スペース)

・・・そこで哲学者のエヴァ・フェダー・キテイは、互恵性を拡大した社会的協働として「ドゥーリア」^①という原理の導入を提唱する。これは、「私たちが人として生きるためにケアを必要とするのと同時に、私たちは、他の人々——ケアの仕事をする人々を含む——が生きるのに必要なケアを受け取れるような条件を提供する必要がある」という原理である(キテイ 2010: 244)。そしてこの原理は、「ケア提供者(care-givers)とケア享受者(care-receivers)のウェルビーイングがともに社会関係のネットワークのもとで成立する」ことを前提とする^②。

ただし、保育や医療の現場では、ケア提供者とケア享受者は必ずしも社会的協働の関係にはない(Kittay 2001; 岡野 2012)。2016年3月13日の朝日新聞の記事^③では、朝日新聞デジタルのアンケート調査(回答数436)を元に次のような結果が報告されている。すなわち・・・

手順2：論文もしくはレポートの末尾に注と参考文献表をつける

注

(1)「ドゥーリア(doulia)」とは、出産後、はじめて赤ん坊を世話することになる母親をサポートする人を指す「ドゥーラ(doula)」をアレンジしたキテイによる造語である(キテイ 2010:158)。

(2)この点については、次の解説に詳しい。Sander-Staudt, M., "Care Ethics," *The Internet Encyclopedia of Philosophy* (<http://www.iep.utm.edu/care-eth/>), 2017.01.24 閲覧.

(3)「最期の医療、どう決める？」『朝日新聞』(2016.3.13 朝刊).

参考文献 (日本語)

岡野八代, 2012, 『フェミニズムの政治学』みすず書房.

キテイ, E.F., 2010, 『愛の労働あるいは依存とケアの正義論』(岡野八代・牟田和恵
監訳) 白澤社.

参考文献 (外国語)

Kittay, E.F., 2001, When Caring Is Just and Justice Is Caring: Justice and Mental Retardation,
Public Culture, Volume 13, Number 3, pp.557-579.

- 補足: ①日本語文献は姓の50音順、外国語文献は姓のアルファベット順とする。
同一著者の場合は出版年順とする。同一著者で出版年が同じ書籍の場合
は、「(山田 1996a: 95)」「(山田 1996b: 103)」などと、出版年にabc...を
つけて区別する。
- ②著者が2名以上の場合、「・」でつなぐ。3名以上いる場合は、2人目以
下を「他」として省略してよい。なお、手順2で説明する参考文献表内では省略しない。
- ③新聞記事などで著者名が不明な場合は、本文中に簡略情報を記すことが
困難なので、方式Iと同じように文献注を使ってもよい(上記「手順2」
の「注(2)」および「注(3)」参照)。

(3) 文末の参考文献一覧表の中での文献情報表示形式

※著者が複数いる場合、記載された順に書く

※全体の内容を参考にした場合は、引用頁の記載は要らない

※該当頁は「p. ○」または「pp. ○-○」(複数頁にまたがる場合)と表記する

①**日本語単行本**: 著者名, 出版年, 『書名: 副題』出版社名.

例)

小熊英二, 1995, 『単一民族神話の起源: 〈日本人〉の自画像の系譜』新曜
社

長谷川公一・浜日出夫・藤村正之・町村敬志, 2007, 『社会学』有斐閣.

②**日本語編書全体**: 編者名+編, 出版年, 『書名』出版社名.

例)

船橋晴俊編, 2001, 『講座環境社会学2: 加害・被害と解決過程』有斐閣.

③**日本語編書の一部**: 著者名, 出版年, 「章題名」編者名+編『書名』出版社名,
pp.+章の初頁-終頁.

例)

船橋晴俊, 1998, 「環境問題の未来と社会変動: 社会の自己破壊性と自己組
織性」船橋晴俊・飯島伸子編『講座社会学12: 環境』東京大学出版会,
pp.191-224.

④**翻訳書**: 著者名, 翻訳の出版年, 『訳書名』(訳者名+訳) 出版社名.

※著者名は、ファミリーネーム、ファーストネーム・ミドルネームのイニシヤ
ルの順

例)

フロム, E., 1951, 『自由からの逃走』(日高六郎訳) 東京創元社

⑤**日本語雑誌論文**: 著者名, 出版年, 「論文題名」『雑誌名』巻(号), pp.+論文の初
頁-終頁.

例)

山本泰, 1993, 「マイノリティと社会の再生産」『社会学評論』44(3),
pp.262-281.

⑥**翻訳論文**: 著者名, 翻訳論文の出版年, 「翻訳論文の題名」(訳者名+訳), 論文の
所収された雑誌や単行本の情報(①~⑤参照), pp.+論文の初頁-終頁.

例)

マッカーシー, J. M.・メイヤー, N. Z., 1989, 「社会運動の合理的理論」(片
桐新自訳), 塩原勉編『資源動員と組織戦略: 運動論の新パラダイム』
新曜社, pp.21-58.

⑦**外国語単行本**：著者名, 出版年, 書名, 出版社名.

※「」は半角スペース

例)

Parsons, T., 1951, *The Social System*, Free Press.

⑧**外国語編書**：編者名 ed., 出版年, 書名, 出版社名.

※編者が複数いる場合は併記して「eds.」とする

例)

Camagni, R. ed., 1991, *Innovation Networks: Spatial Perspectives*, Belhaven Press.

⑨**外国語編書の一部**：著者名, 出版年, “論文名,” 編者名 ed., 書名, 出版社名, pp.+
論文の初頁-終頁.

例)

Beck, U., 1994, “Self-Dissolution and Self-Endangerment of Industrial Society:
What Does This Mean?,” Beck, U., Giddens, A. and Lash, S. eds., *Reflexive
Modernization: Politics, Tradition and Aesthetics in the Modern Social Order*,
Blackwell, pp.174-183.

⑩**外国語雑誌論文**：著者名, 出版年, “論文名,” 雑誌名 卷(号), pp.+論文の初頁-終
頁.

例)

Wrong, D. H., 1961, “The Oversocialized Conception of Man in Modern
Sociology,” *American Sociological Review* 26, pp.183-193.

⑪**年次刊行物**：編集機関名, 出版年, 『題名』年次.

例)

経済企画庁, 1994, 『国民生活白書』平成6年版.

⑫**新聞**：「記事名」『新聞名』（年月日朝刊 or 夕刊）.

※執筆者名が明らかな場合は明記する。電子版の新聞記事の場合は、⑬に準
じる。

例)

「14歳『心の闇』」『朝日新聞』（1998.6.30朝刊）.

⑬**インターネット上の情報**：著者名（判明する限り）、最終更新年（判明する限り）、
「題名」（URL）閲覧年月日+閲覧.

例)

日本社会学会, 2006, 「日本社会学会倫理綱領にもとづく研究指針」
(<http://www.gakkai.ne.jp/jss/about/shishin.pdf>) 2017.2.9 閲覧.

例)

「明治学院大学社会学部」(<http://soc.meijigakuin.ac.jp/>) 2017.2.10 閲覧.

Ⅲ. 引用時の諸注意

(1) 直接引用

元著者の表記を尊重し、誤字があっても、最大限原文通りに記載する。ただし、引用文中にカッコが用いられている場合、引用文中のカッコは引用を示すカッコ（「」）と区別するため二重カッコ（『』）に変更する。

(2) 名前の表記法

Ⅱで説明した文献の簡略情報を表示する際以外に本文中に記載する人の名前は、初出のときは姓名を書き、2度目以降は姓のみでもよい。一般的に、敬称（先生、教授、博士など）は付けない。

(3) インターネット上の情報

不特定多数の人間によって頻繁に更新されるもの（例えばWikipedia）や掲示期間の短いもの（新聞のネット記事等）は引用に適さない。

(4) 孫引き

Aという著者の文章を引用したBという著者の文章に基づいて、Aの文章をレポート・論文の中で引用すること（孫引き）は原則として避けるべきである（原典に当たることが望ましい）。やむをえない場合は、注で両者の関係を明確に示す。